



Title	アイヌ語幌別方言の使役接尾辞について
Author(s)	高橋, 靖以
Citation	北方言語研究, 7, 99-106
Issue Date	2017-02-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64513
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_takahashi.pdf



[資料・研究ノート]

アイヌ語幌別方言の使役接尾辞について

高 橋 靖 以

(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

1. はじめに

本稿ではアイヌ語幌別方言の使役接尾辞の用法について分析し、従来アイヌ語において知られていなかった指示転換の用法がみられることを指摘する。また、その結果を受けて、アイヌ語幌別方言の使役接尾辞に関し通言語的観点からの検討を試みる。

アイヌ語幌別方言は北海道南西部のアイヌ語方言の下位方言に位置付けられる (Asai 1974:100)。以下の分析では、金成・金田一 (1959-1966) をデータとして用いた。これは yukar 「英雄叙事詩」と呼ばれる韻文体の口頭伝承を記録した資料である。

2. アイヌ語の使役接尾辞に関する先行研究

田村 (1988: 63) はアイヌ語沙流方言 (北海道南西部) の使役接尾辞¹に関して「意味の許す限り、あらゆる動詞にみられる、生産的な構造である」と位置付け、以下のように記述している。

a) 使役形「～させる」— 母音や *w, y* で終わる語幹には *-re* を、*r* で終わる語幹には *-e* を、その他の子音で終わる語幹には *-te* をつけて造る。アクセントは、語尾に移らない。

使役の対象 (させられる人) は目的語になるので、自動詞が使役形になると、他動詞になる。

e 「～を食べる」

é-re 「～に～を食べさせる」

iku 「酒を飲む」

iku-re 「～に酒を飲ませる」

kásuy 「～を手伝う」

kasuy-re 「～に～を手伝わせる」

kar 「～を作る」

kár-e 「～に～を作らせる」

raworer 「沈む」

raworer-e 「～を沈ませる」

cis 「泣く」

cis-te 「～を泣かせる」

¹ 田村 (1988:63) は「使役形」の他に「不定使役形」についても記述しているが、本稿の議論に直接関係しないため割愛した。

wen 「悪い」
 wen-te 「～を悪くする」

田村（1988）はアイヌ語使役接尾辞の形態論的構造を明確に記述したものであるが、その用法に関しては十分な言及がなされていない。一方、佐藤（2008:237）はアイヌ語千歳方言（北海道南西部）のデータに基づき、「許可（相手の意志に任せる場合）」や「強制（相手の意志に反する場合）」などの場合にも、使役接尾辞が用いられることを述べている。

言語類型論においては、直接使役（direct causation）と間接使役（indirect causation）の区別がなされる²。すなわち、アイヌ語の使役接尾辞は直接使役と間接使役の両方の用法を持つことが先行研究によって明らかにされている³。

3. アイヌ語幌別方言における直接使役と間接使役

本節ではアイヌ語幌別方言における使役接尾辞の用法の全体を把握するため、直接使役と間接使役について用例を提示する。

3.1. アイヌ語幌別方言における直接使役

直接使役の例を以下に示す⁴。

(1) kamui kotan / tupbish a-wente /

神 村 二つ INDEF.TR.SUBJ-壊す (lit. wen-te [悪い・させる])

a-chishte bakno /

INDEF.TR.SUBJ-泣かす (lit. chish-te [泣く・させる]) AP

iki-an yakka, / hemanta e-rushka, / ruwe he an?

する-INDEF.INTR.SUBJ CONP 何 2SG.SUBJ-怒る NOM AP ある

「神々の郷々を／二つまでわたしが破壊し／泣かすまでに／わたしがやったのに／何をお身はふさいで／いるのであるか」（金成・金田一 1961: 128-129）

(2) rorun burai ne / a-koyaitunashka, / ratki burai /

上座にある 窓 CMP INDEF.TR.SUBJ-自ら急ぐ 垂れる 窓

burai orotpe / chinki kashi / a-kokkaechiu / burai kashi /

窓 覆い 裾 上 (POSS) INDEF.TR.SUBJ-膝をつく 窓 上 (POSS)

a-nankamure /

INDEF.TR.SUBJ-顔を覆う (lit. nan-kamu-re [顔・覆う・させる])

² 直接使役は使役者が直接的あるいは意図的に使役イベントに関与するタイプの使役である。一方、間接使役においては使役者の関与は間接的あるいは非意図的である。詳細は Comrie (1989: 171), Dixon (2000: 67-70) 参照。

³ なお、アイヌ語の使役に関しては、他動詞化接尾辞を使役の一種として扱う分析 (Oshima 1982: 208) が示されている。この問題は重要であるが、本稿の議論には直接関係しないため、詳細は取り上げない。

⁴ 例文の引用に際しては、韻文の区切りをスラッシュで示し、一部の表記の改変をおこなった。

ari pon a-yup-i /

QOT 小さい INDEF.TR.SUBJ-兄-POSS

a-sunkere

ruwe ne.

INDEF.TR.SUBJ-嘘を言わせる (lit. sunke-re [嘘をつく・させる]) NOM である

「曹司彦なる／わたしの若い兄さんへ／わたしがたのんで、／『ここに父さま／母さまが／いささか酒をつくって／神祭をするため／わが姪を／われ見たいなあ、／きらきら彦の／わが子といっしょに／来なさい』とわたしのにいさんを／してわたしがうそを言わた。」(金成・金田一 1963: 249)

(5) a-wenturesh-i /

a-otuiike /

anun

hetap

INDEF.TR.SUBJ-悪い妹-POSS

INDEF.TR.SUBJ-下らぬ者 他所の者

AP

ne /

i-koikire

shiri /

である

INDEF.OBJ-攻撃させる (lit. koiki-re [攻撃する・させる])

NOM

ne

kuni

a-ramu

awa /

oroyachiki /

である

CONP

INDEF.TR.SUBJ-思う

CONP

なるほど

shine

chise

ta /

chiukoikire /

rokokai,

一つの

家

CMP

喧嘩をさせる

VP

「わたしの悪い妹／のちくしょう／他人をでも／われにうたせること／であろうかと思つたのに／どうやら／一つ家にて／相たゝかわせ／たのだった」(金成・金田一 1963: 199)

(6) santaunmat /

neyakka / shino

nupetne p /

ne

p

サンタウンマツ (人名)

AP

本当に

喜ぶ もの

である

もの

ne

kusu /

tun

ne

wa /

isoetapkara /

である

CONP

二人

である

CONP

獲物の舞踏をする

isoerimse /

tu

mina

itak /

re

mina

itak /

utashpare /

獲物の踊りをする

二つの

笑う

言葉

三つの

笑う

言葉

交わす

i-kokamahupte,

INDEF.OBJ-肉を入れさせる (lit. ko-kam-ahup-te [～に・肉・入る・させる])

「山丹姫／もまた／大そう喜んだ／ものだから／二人で／猟の踊りをし／猟の舞踏をし／二つの笑い言葉を／三つの笑い言葉を／互いに返しつゝ／我に肉を入れさせ」(金成・金田一 1966: 372)

4. 使役接尾辞と指示転換

アイヌ語幌別方言の使役接尾辞には、第3節で扱った直接使役や間接使役以外の用法がみられる。

(7) a-kishma

humi /

yupke

rok

be /

atuiyaumbe /

INDEF.TR.SUBJ-掴む

NOM

強い

VP

NOM

アトゥイヤウンベ (人名)

rarak konru ne /
 なめらかである 氷 CMP

a-tekbosore /

INDEF.TR.SUBJ-腕を抜ける (lit. tek-boso-re [腕・突き抜ける・させる])

kuttokono / i-shirekatta,

仰向けに INDEF.OBJ-地面に叩きつける

「我がつかまえ様／強かったのに／アトゥイヤ彦／すべる氷りの如く／わが腕の間を抜けて／仰向けに／我をしたたかに投げ」(金成・金田一 1966: 309)

例文(7)の a-tekbosore において、使役者は不定人称主格の a-「私が」であり、被使役者は atuiyaumbe 「アトゥイヤ彦」であると分析することができる。この例において、使役接尾辞は、指示転換 (switch-reference) ⁵の機能を有すると考えることができる。また、この例文は等位接続の事例とみなすことができる。

なお、従属節においても指示転換の用法がみられる。

(8) ne kotan kor be / ne moshir kor be /
 どこ 村 持つ 者 どこ 国土 持つ 者

a-tamoraukire

shiri /

INDEF.TR.SUBJ-刀を避ける (lit. tam-orauki-re [刀・逃がす・させる])

NOM

okai chiki / ene wa boka /

ある CONP このように CONP AP

iki-an i ka / oarar isam.

する-INDEF.INTR.SUBJ NOM AP 全く 無い

「どこの村の者／どこの国の者／我が太刀のがしたこと／であるなれば／どうとも／我しようが／全くない」(金成・金田一 1966: 83)

例文(8)の a-tamoraukire において、使役者は不定人称主格の a-「私が」であり、被使役者は tam「刀」であると分析することができる。以下の例文も使役接尾辞による指示転換の例とみなすことができる。

(9) kamui rametok / aritak chinki /
 神 勇者 片言 裾

i-ehaitare /

INDEF.OBJ-足りない (lit. e-haita-re [～について・不足する・させる])

aritak chinki / a-ehaitare / ruwe okai chiki, /

片言 裾 INDEF.TR.SUBJ-足りない NOM ある CONP

⁵ 指示転換は、ある動詞と別の動詞の主語が同一であるのか異なるものであるのかを示す、動詞に関わる文法カテゴリーである。詳細は Haiman and Munro (1983: 9) 参照。

makan	ne	ko /	shisembir	un /
どのように	である	CONP	自らの背後	CMP
shikiru-an			ko /	tu nuburu nube /
向きを変える-INDEF.INTR.SUBJ		CONP	二つの	濃い 涙
re	nubur	nube /	a-yaikoranke.	
三つの	濃い	涙	INDEF.TR.SUBJ-自ら落とす	

「神雄が／ひとことのはも／わたしに言いそびれ／ひとことのはも／わたしが言いそびれ／あることなれば、／あいだあいだ／自分のうしろへ／顔をそむけて／いくつもの熱い涙を／数多のあつい涙を／自分ひとりで流す。」(金成・金田一 1959: 385)

例文(9)の i-ehaitare において、使役者は kamui rametok「神雄」であり、被使役者は aritak chinki「ひとことのは」と分析することができる。一方、a-ehaitare において、使役者は不定人称主格の a-「私が」であり、被使役者は aritak chinki「ひとことのは」と分析することができる。なお、i-ehaitare という形式は等位接続の例、a-ehaitare は従属節の例と考えることができる。

5. 使役接尾辞と指示転換に関する考察

指示転換の主要な機能は、参照関係の追跡 (referential tracking) であるとされる (Haiman and Munro 1983: 9, Foley and Van Valin 1984: 339)。アイヌ語の使役接尾辞による指示転換も referential tracking が主な機能であると考えることができる。

アイヌ語の使役接尾辞による指示転換には、等位接続に現れるケースと従属節に現れるケースがある。等位接続においては、主語の転換がみられる。これは、節と節の関係が比較的自由であるという等位接続の性格に関連するものと推測される。一方、従属節においては、主語が維持される。これは、従属節と主節の階層的性格に関連するものと推測される。しかしながら、使役接尾辞による指示転換の動機に関する本格的な検討は今後の課題である。

6. 通言語的にみたアイヌ語の使役と指示転換

使役と指示転換の関連は言語類型論の研究課題の一つである。Song (1996: 38) は Trans-New Guinea 語族の Waskia 語において使役と指示転換の関連がみられることを述べている。この言語では、等位接続とみなすことができる複文において、使役が主語の転換に関わるとされる。

また、風間 (2002: 44-45) はツングース諸語やニヴフ語、エスキモー語ユピック方言においても使役と指示転換の関連がみられることを述べている。これらの諸言語では、従属節とみなすことができる複文において、使役が主語の維持 (不転換) に関わるとされる。

このような通言語的現象は、アイヌ語の使役接尾辞を用いた指示転換の用法と矛盾しないものといえる。この点に関しても今後詳細な検証が必要とされる。

7. おわりに

本稿ではアイヌ語幌別方言の使役接尾辞の用法について分析した。その結果、従来アイヌ語において知られていなかった指示転換の用法がみられることを明らかにした。さらに、その結果を受けて、アイヌ語幌別方言の使役接辞に関し通言語的観点からの検討を試みた。本稿で取り上げた使役接尾辞による指示転換は、アイヌ語の類型論的性格を解明する上で示唆するところは少なくないと思われる。

略号

2: second person, AP: adverbial particle, CMP: case marking particle, CONP: conjunctive particle, FP: final particle, INDEF: indefinite, INTR: intransitive, NOM: nominalizer, OBJ: objective, POSS: possessive, QUOT: quotative marker, SUBJ: subjective, TR: transitive, VP: verbal particle

参考文献

- Asai, Toru. (1974) Classification of dialects: Cluster analysis of Ainu dialects. *Bulletin of the Institute for the Study of North Eurasian Cultures* 8: 45-136.
- Comrie, Bernard. (1989) *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*. [2nd edition] Chicago: The University of Chicago Press.
- Dixon, Robert M. W. (2000) A typology of causatives: form, syntax and meaning. In: Robert M. W. Dixon and Aikhenvald, Alexandra Y. (eds) *Changing valency: Case studies in transitivity*, 30-83. Cambridge: Cambridge University Press.
- Foley, William A. and Van Valin, Robert D. (1984) *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haiman, John and Munro, Pamela (1983) Introduction. In: John Haiman and Munro, Pamela (eds.) *Switch-reference and universal grammar*, 9-15. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 金成マツ・金田一京助 (1959) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 1. 東京: 三省堂.
- 金成マツ・金田一京助 (1961) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 2. 東京: 三省堂.
- 金成マツ・金田一京助 (1963) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 3. 東京: 三省堂.
- 金成マツ・金田一京助 (1966a) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 6. 東京: 三省堂.
- 金成マツ・金田一京助 (1966b) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』 7. 東京: 三省堂.
- 風間伸次郎 (2002) 「ツングース諸語における『使役』を示す形式について」『環北太平洋の言語』 8: 37-50.
- Oshima, Minoru. (1982) On causative and transitive construction in Aleut, Eskimo and Aynu. 『人文研究』 64: 201-216.
- 佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京: 大学書林.
- Song, Jae Jung (2001) *Causatives and causation: a universal-typological perspective*. London: Longman.
- 田村すず子 (1988) 「アイヌ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』 1. 東京: 三省堂 (亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『日本列島の言語』 東京: 三省堂, 1997 所収) .

Causative Suffix in the Horobetsu Dialect of Ainu

Yasushige TAKAHASHI

(Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University)

This paper analyzes causative suffix in the Horobetsu dialect of Ainu. In the dialect, causative construction correlates with switch-reference. In the coordinate clause, causative construction may function as a different-subject marker. In the subordinate clause, causative construction may function as a same-subject marker.

(たかはし・やすしげ takahashi@let.hokudai.ac.jp)